

点字ブロック進む劣化

視覚障害者が安全に歩行するために欠かせない「点字ブロック」の劣化が問題となっている。点字ブロック上に車や自転車を置くマナー違反は、事故やけがなど視覚障害者の危険を招くだけでなく、摩耗も早めるが、自治体によっては十分な予算を確保できなかったり、優先度が低かったりして修繕が進まないケースがあり、関係者は対策の強化を求めている。

(報道部・石田あやめ)

視覚障害者の危険



点字ブロックをたどって通勤する渡辺さん。「命綱」の劣化は視覚障害者にとって大きな問題だ

◆ 私たちの命綱

「点字ブロックは私たちに『命綱』」。点字ブロックを使いながら毎日、約1.5キロの道を通勤する全盲の渡辺寛子さん(55)「福島市」は、視覚障害者の思いを代弁する。「ブロックの上に『何も無い』と信じているからこそ、安心して歩ける」。

ただ、点字ブロックの一部が車や自転車などで踏まれていたり、あるのも実情だ。同市の視覚支援学校では、生徒が通学中に点字ブロック上のトラックに気付いたものの、サイドミラーに気付かず頭をぶつける事故が発生した。自身も全盲の日本剛志教諭(46)は「視覚障害者は白杖で足元の危険は分かるが、上平身に近い障害物は感知できない。毎日が危険と隣り合わせだ」とリスクを指摘する。

◆ 設置のみ補助

県視覚障がい者福祉協会によると、点字ブロックは

適正な使い方をした場合でも10～15年で修繕や交換が必要になるが、ブロック上への駐車車は凹凸の摩耗を早める。摩耗すると視覚障害者が凹凸を認識できず、方角や歩道の終わりが分からず車道に出てしまうなどの危険につながる。

修繕や交換の費用は場所や条件によって異なるが、福島市の場合、埋め込み型(30センチ四方)の交換費は1枚当たり約3千円、1平方メートルをまとめて交換すると約1万円かかる。国内で初めて点字ブロックが設置されてから60年近くなり、劣化箇所は少なくないが「予算上、すぐに交換するのは難しい場合もある」(道路保全課)という。市によると、

国の補助は設置時のみで、修繕時は対象外。安全面からガードレールやカーブミラー、縁石などの修繕が優先されることも多く、点字ブロックの修繕が進まない一因になっている。

◆ 地域が理解を

摩耗早める駐停車 ■ 足りぬ修繕の予算

Q

進行方向や前方の危険を知らせ、視覚障害者は白杖(はくじょう)や足の裏の感覚で凹凸(はくくぼ)を感じて歩く。弱視や色覚障害の人、黄色を目印に道路の方向や交差点を識別しているが、近年はまちづくりの観点から周囲の環境に調和する色合いのものが増え「見えにくくなっている」とも課題。国内では1967年に岡山県で初めて設置され、その後、徐々に普及した。点字ブロックが設置されている道路の管理者が維持管理を担う。

「視覚障害者は社会的にマイノリティだが、声を無視していい理由にはならない。健常者にも関心を持ってもらえば、視覚障害者が安全に歩ける社会になるのではないか」。県視覚障がい者生活支援センターの金子久雄センター長(66)はこう訴える。視覚障害者の「命綱」を守るための方策を、地域社会が「丸」となって考えていく必要がある。

障害者福祉に詳しい福島大人間発達文化学類の小樽山宗浩特任教授(64)は「自治体の予算が劣化の敷に追いついておらず、維持管理費の確保は長年の難題。募金を集めるなどの方法も一案だ」と提案する。

視覚障害者がより安全な生活を送るためには、点字ブロックだけでなく、情報通信技術(ICT)を使った道案内の導入や周囲からの積極的な声かけなど「複合的な環境整備が必要」とし、実現のためには「理解の醸成が不可欠だ」と指摘する。

▲1月15日 福島民友新聞掲載

点字ブロック上に車などを駐車することは、どのようなことをもたらしていますか？

点字ブロックの修繕や交換で、議題となっているのはどんなことですか？

この記事を読んで、あなたはどのようなことを感じていますか？